激震地 川口町より

河合靖久

中越大震災発生後十月三十日に判明した「震度七」の川口町に、翌日から十六年ぶりの「通勤」をしています。

担任した子どもたちや親、同僚、お世話になった人たちの多いこの町で、何か役に立つことはないかと暇を見つけ出かけています。

災害対策本部や避難所・集落などの訪問には、にいがた県民教育研究所・所員の名刺が大活躍です。

これまで新潟地震で、液状化した土砂に埋まった家屋の掘り起こしや給水活動に一ヶ月ほど従事し、水害で水没した実りの少ない稲刈りの手伝いなどを経験しました。

道路が寸断され孤立した山古志の全村避難を、自衛隊の大型ヘリの行き交う大手高校のグランドに砂埃と轟音の中、老犬の散歩を装い、何回も見に行きました。しかし、何もできない自分にふがいなさを感じていました。

十月二六日、通行止めの和南津トンネルの山道を徒歩で川口町に入った先輩から「被害が大きく、町に在住の人が動けないので救援に手を貸して欲しい」との相談を三十日に受け、翌三一日、混乱する小千谷市を抜け川口町に入りました。前日になって初めて「川口町は震度七」とのニュースで、川口駅前は報道陣だけが目立ちました。

ありがたいことに十六年前に離れた川口町なのに、何人もの保護者に声をかけられ、泣き、笑いながら、再会の喜びを交わしました。

家の前で煮炊きしている所で、偶然、目を合わせた

三十年もの空白を越えて、瞬間的に名前が浮かび、手を取り合い涙を流し喜び合いました。

その後は、顔に見覚えがあって声を掛けると、三年生の頃受け持ったとか、名前を違えて呼んだり、家庭訪問したはずの家が見つからなかったり、さまざまなドラマがありました。

災害のひどい地区の避難所やテント、お年寄りを尋ねながら、話を聞いています。

今回の地震の特徴は、下から突き上げる揺れの強さと、長期にわたる余震だと思います。

災害地を歩いての感想は、がけ崩れ、道路の陥没などで集落が孤立したこと、家屋の崩壊が激しいこと、外からは何でもないような家の中も、壁や天井や家具が散乱していること…。

「生きててよかった」の明るさで、皆がたくましく生きていること。近隣の絆を大切に、助け合って暮らしている姿が誇らしく思えました。

全国からの支援が、早かったことも特徴の一つでしょう。

田麦山では、体育館だけでなく教室まで避難所とし、それでも足りずにグランドのテントでも避難生活が続いていました。

大雪で登校できなかった子らに、徒歩で通信簿を届けた竹田・牛ヶ首地区にも行って話が聞けました。家の中の総桧・漆塗りの太い柱や梁が、直下型の揺れに耐え切れず傾き『全壊』に認定との事でした。とても悲しくなりました。

老人世帯も多く、家の再建は「自己責任」では無理です。国民の生命を守るために、個人の建物・財産への補償が待たれています。

仮設住宅の入居も始まりました。予想される数メートルの積雪に耐え、春からの希望を共にしたいと願いながら、不規則な通勤は続きます。

（かわい　やすひさ・研究所所員）